
灯り祭り

燈 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灯り祭り

【Nコード】

N9198Z

【作者名】

燈 優

【あらすじ】

祭囃子の響く中で。

ひそりひっそりのぞき見る。

それは切なな憧憬と、叶えぬ小さな小さな願い。

（ブログ掲載済）

明々と灯る提灯が点々と道を彩っている。祭囃子が鳴り響き、参道にはこの日限りの出店が並ぶ。はしゃぐ子供たちの声に威勢のいい掛け声が混ざり楽しい喧騒を生んでいた。

からころからころと鳴り響く下駄に小さな袋に入れられた金魚が通り過ぎる。水面間近で息をする赤色は、一夏が過ぎたときにもその影を牽いていられるだろうか。

楽しそうだと。常に思っている。毎年同じ日に開かれるこの祭りが、年始の祭りとはまた異なり、好きだった。いつも混じることができずに木の影に隠れてお面を被って。人の眼に触れることはいけないと、ずっとずっと言われてきているけれど。

毎年この祭りだけは、ついつい見に来てしまうのだ。

誰にも。見つかりませんように。

ころ、と。石畳ならば鳴ってしまうぽっくりも。土の上ならば音は静かに吸い込まれる。わたしの姿をすっかり隠してしまう木の後ろで、そつと面をつけた顔で覗き見る。

ふとその前を、同じくらしいの背格好をした人間の子供たちが通り過ぎ。慌てて隠れた。子供たちは気付かずに、楽しそうに参道の明かりへと紛れてゆく。

ああ。ほんとうは。

大きな人間に手を引かれて歩く小さな子供。その手にはふわふわとしたものが握られていて。

ほんとうは。

小さな神社の小さな参道。そこがまるで世界のにぎやかな全てを

集めてきたかのように。

わたしも一緒に、その光りの中を歩きたいのだ。

祭囃子は遠くなる。少しずつ少しずつ、灯っていた明かりたちが消えてゆく。出店は骨組みすらなくなり、祭りの後の忘れ物たちが参道に転がる。

常の寂しく静かに戻った神社の前に。ころんとひとつ音が鳴る。誰もいなくなった階段の前に。ゆらりと浴衣の袖が揺れる。

お面をしたままのその小さな影は、寂しそうにそこに佇み、ころころころとぼっくりを鳴らす。

来年こそは。

小さなその手をぎゅっと握り、お面の子供は小さな何かを決意する。面の表情は変わらずに、ふらりと大きな尻尾が揺れた。

誰もいなくなってしまった石畳の参道のその先に。片方は欠けた石像と、その向き合いに。

笑んでいるかのような顔をしたお稲荷さんが守っていた。

幾年も幾年も。見守ってきた小さな神社の夏祭り。飽くるほどそれを見て尚思い馳せるは。手を届かせてはいけない領域に、不思議と羨むものがあるのだらう。

からころ、から、ころと。音響く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9198z/>

灯り祭り

2011年12月28日20時52分発行